

## 特集

# 国民は医療をどう見ているか

2004年の巻頭号となる本号の特集テーマは、「国民は医療をどう見ているか」である。

このテーマは、一見すると、ある意味でこれまでも繰り返し議論されてきたもののようにも映るし、場合によっては古くからある平板な話題のようにすら見える。けれども、今「国民は医療をどう見ているか」というテーマが問われる時、そこには従来にはなかった根本的に新しい要素が含まれていると思われる。

一つの大きな背景としては、以前に比べ、病気が医療によって“簡単に治療される”ということが少なくなった、という構造的な変化がある。高齢者ケアや終末期ケアなどはもちろん、「現代の病い」の大半を占める慢性疾患ないし生活習慣病の場合、単発の手術や薬剤の処方などで病気が鮮やかに治癒する、という場面はむしろまれであり、そうなると、病気の治癒そのものにとって、患者ないし医療の受け手の認識や関与のあり方が大きな意味をもち、あるいは治療(または治療に至らない場合)の「プロセス」それ自体が重要となってくる。こうした文脈の中で、「国民は医療をどう見ているか」というテーマは、従来にはない、医療そのもののあり方に踏み込んだ新しい意味をもってくることになる。

また、最近の医療のあり方に関して多くの人々が連想する話題として、様々な医療ミスなどをめぐる医療の安全性の問題があるが、これについては、医療過誤や安全性そのものにかかわる対応と並んで、そもそも医療の内容や現場の動向などがメディアを通じて国民にどう伝えられ、人々がそれについてどのような理解や評価をもつか、といった点それ自体を問うていくことが重要となっている。

さらに、例えば医療政策の決定プロセスへの国民あるいは患者の参加やその声の反映といったことも含めて、「国民は医療をどう見ているか」というテーマが、従来にはない新しい局面に入ろうとしているのが現在ではないかと思われる。

本特集は、こうした話題について、様々な角度から光を当てようとした内容となっており、今後の議論の新たな発展の手がかりとなれば幸いである。(広井 良典)